



吉島飛行場方面に逃げていく人々 / 池亀 春男 作 (広島平和記念資料館 所蔵)

飛行場での状況は、おおよそ次のようなものだった。

散乱していたわずかな戸板やトタン板を、土手から飛行場の地面に被せるように差し掛け、中に入って日差しを避けている人々も見受けられたが、これら避難者は投下後二時間も経っていないためか、まだ百人以下であった。

警防団の一人が「若しこのままで艦載機が来たら皆殺しになる、もっと散らばった方がよい」と言ったところ、これを聞きかじった中年のおばさんが「今日も艦載機が来るんじゃない」と泣き声でわめいたため、次の攻撃に怯えた者も多かった。こんな時のちよつとした発言が、とんでもない流言飛語となって蔓延する、パニック時の怖さを目のあたりにしたようだった。

ここも多くの負傷者がいたので、結局顔の

手当てはあきらめて帰宅し、改めて家の中を見ると、畳は全部ハネ上がって天井は落ち、梁が三つに折れて落下、屋根には大穴が開いている、床はガラス片とゴミやガラクタで足の踏み場もない。母は縁側のゴミやガラスを掃き取って、人ひとりが横になれる場所を作ってくれていた。私は両足を庭に垂らし、そこに大の字になったまま意識を失った…。

夢うつつの中で、かすかに耳に記憶しているのは、中国塗料(株)の女子挺身隊長として仕事中に被爆し、ガラス片創を負った下の姉の「空が真っ赤に見えるよ」とか「立石さん父の勤務先社長家族」を運ぶ担架はどこにあるの?」或いは「おばちゃんお水を頂戴」と水を欲しがる幼い女子学生の声(後で聞いたが末期の水となつたらしい)などであった。

私が意識を取り戻したのは、それから二日後と聞いている。蚊帳の中の布団の上で浴衣を着て、上を向いたままの姿であった。父の行方がわからないこともその時に聞いた。

身体中が痛い。熱線を浴びた時の学生服にゲートル姿が幸いして、腹部と背中は無傷だったが、寝返りを打つ度に、火傷によって浸み出した体液が耳の孔に入る。二人の姉と母とがその都度脱脂綿で処置してくれた。今になって思うと、大破したものの家が焼け残り、手当てをしてくれる家族がいたお陰で、中心部で被爆し亡くなれた多くの人たちに比べれば、私は殷様みたいなものだった。

困ったのは食事であった。顔は目鼻口の部分に穴を開けた厚手の木綿でカバーされ、唇は腫れあがって特に左の唇端の痛みがひどく十分に開かない。右側の僅かな隙間からスプーンで入れてもらった流動食、中でも缶詰の大豆を潰したものや薄切りの胡瓜、特に忘れられないのが、前日手に入れた白桃の味

だった。

小便是取って貰ったが、大便についての記憶がない。火傷に効くからと云って潮水で湿布したり、薄切りの胡瓜を貼り付けたり色々手当てを受けたが、受傷部はすべて化膿した。近所の人も容態を心配して見に来てくれる。身近な者を失った人、行方不明となつて人の話も耳に入る。無傷の人たちが、何故か髪が抜け、口から出血して死んでいったらしい。「ピカの毒ガスを吸うたから」との噂を聞いたのも、その頃であった。私も焼け残った髪を引っ張ってみたが、痛いだけで抜けたりはしない、まだ大丈夫と、いささか安心した。

毎日、近くの飛行場で死体を処理する煙が風に乗って枕元に流れて来る、両手を鼻先にもつてくると同じ匂いがする。「手が腐りよるわい」切なさや悲しい思いが込み上げてくる。悪臭を放つ私の手当てをしてくれた母や姉はもっと大変な思いをしたことだろう。

行方不明の父を探すため、家中で手分けして毎日収容所を尋ねているが、全く手がかりが無いようだ。勤務先に私が修理した跡の残っている(父の自転車の残骸はあったが、それらしい骨などは無い)とのことであった。

四・五日後隣家に住む河野の叔父が私を手押し車に乗せて、航空隊の軍医の所まで診療のため連れていってくれた。暑い日差しの中を列を作って順番待ち

をし私の番が来た、両手の包帯をむしり取った軍医は大型のピンセットの側面で患部の腐肉を削り取る、血が砂の上に滴り落ち、手の甲の中に白いもの(骨?)が見える、私は「男は弱音を吐くな!」と奥歯を噛みしめながら耐え、あとは赤チンとりバガーゼそして包帯で終わった。以後は軍医のところへ行かなかつた。この両手首は後でひどいケロイドになった。

しばらく経った頃、用便のため初めて立ち上がり、垂木と床板だけの部屋をゆっくり歩いて鏡の前まで来た時、ハツとして息を呑んだ、赤鬼が浴衣を着て立っている「これがワシ



あき書房(昭和15年)最新広島市街地図
※但し車の施設は入っていない

光南一帯は、昭和14年頃から埋め立てが始まり
昭和18年頃には吉島飛行場があった
(現在のポリテクセンター、吉島プール一帯)

